

04R eport



GS 連続シンポジウム 2009
まちづくりへのブレクスルー このまちに生きる

第4回 2010年3月6日(土) 15:00~18:00 於：東京大学工学部1号館土木設計演習室

都市文化を引き継ぐこと、積み重ねるまちなみ - 京都 宇治 報告レポート



日本を元気にすべくがんばりましょう

日本の先行きに何かと不安が感じられる現在、原点である日本らしさを探求すること、「日本が本来の日本になる」ことが、日本を元気にする上で重要ではないかと思う。即ち、「人間の生活、生業が風土の中で展開され、それが自然の営為とともに表出される」文化的景観をひとつでも多く具現化していくことが、日本そして日本人がその原点を取り戻す一歩となるだろう。中西氏の基調講演は宇治の風土に生きる人間の生業や奮闘を雄弁に語られ、地域における生き生きとした人の活動こそがそのベースとなることを示して頂いた。みなさん、日本を元気にすべくがんばりましょう。
遊佐謙太郎（三菱地所株式会社）



こういう人が「まち」を持続させるんだな

地域を愛するアイデアマンで仕掛け人しかも戦略家。茶香で集客したかと思えば、宇治橋通り商店街を地域コミュニティの核としてにぎわいを演出する。時代は違っても昔からそれぞれのコミュニティがあり、それが宇治の「まち」をつくってきた。その営みも「文化的景観」であるという。一見捕らえ所の難しい文化的景観だが、宇治市の取り組みとの連携で、その成果が模範とされるだろう。エネルギーな中西さんの行動を見ていてそう確信した。
新井久敏（群馬県）



包括的まちづくり支援制度が望まれる

人々の営為が育ててきた地域固有の文化に焦点を当てる文化的景観の基本的な姿勢には大いに敬意を表したい。しかしながら、残念なことに文化的景観の制度単体の適用では、今回の宇治橋通り商店街のように面的に広がる範囲全体の修景事業をサポートし、地域文化に触れることのできる「心地よい空間」を実現する上で、財源や事業スキーム等の観点から限界があるであろう。エンドユーザーの立場に立った空間づくりのためには、文化庁と国土交通省が手を取り、街路景観整備等の面的なハード整備の補助も包含する歴道事業と文化的景観保護推進事業の合わせ技のような包括的まちづくり支援制度が望まれる。
土橋 悟（都市環境研究所）



本当の意味での”文化的”景観とは

文化的景観というキーワードを基に実際宇治で行われていること、そこに暮らす人の思い、そして現在抱えている問題がよく理解できました。まちづくりの中でそれぞれの土地における文化という言葉が示すことをよく考えなければならぬのだと再認識しました。文化的景観がまちづくりのツールとして地域の活性化に貢献するだけでなく、新たな共通言語として今後も議論は続くのでしょうか、そこに住んでいる人、地域のまちづくりを推進している人の思いをより尊重できるものとして認識されなければならないということを考えさせられたシンポジウムでした。
末松慎介（株式会社 TIS&PARTNERS）

手探りでも行動を起こす

今回「文化的景観」を主題とし、宇治橋商店街の具体的な取り組みや現在に至るまでの経緯を伺い、より住民が主体となるまちづくりの重要性を感じました。文化的景観とは街の外観だけではなく、街中での住民の活動の様子という意味合いが強い事を理解したので商店街振興組合理事長の中西さんのように手探りでも行動を起こす事、またその行動を住民にどう起こさせるかが今後大事になってくるのではないかと思います。そのためにもこのようなシンポジウムは街への意識向上に繋がる重要で貴重な機会であると思いました。

佐藤翔太郎（芝浦工業大学）

責任編集：川添善行

GSデザイン会議



GROUNDSCAPE DESIGN INSTITUTE